

# 登山・登攀の記録

## 北アルプス 劔岳東大谷 二本槍ルンゼ

日時:1959年4月29日～4月30日

メンバー:小山貢、関田和雄

概要:劔岳東大谷二本槍ルンゼの登攀記録

### 記録

4月29日 晴れ

東大谷出合い(5:30)－二本槍ルンゼと左俣との出合い(7:25/7:50)－ザツテル(12:00/12:30)－ビバーク地点(19:00)

冬の雪より春の雪が多かったのか谷筋の雪が例年より多く壁面の雪は少なかった。デブリの上を40分ほど歩き、二俣の上部を見ると駒草ルンゼの下部から左俣の右岸まで谷一杯にクレバスが入っている。深い落石のトレイルにそって登り、ルンゼのクレバスに入る。休憩して食事。

ここでアンザイレンして出発。二本槍ルンゼに入ると非常な急傾斜でカッティングしながら適当にルートを取って登る。

時間を稼ぐ為にツルベ登攀を行い、主として右岸のラントクルフトや小クレバスをアンカーレッジに利用した。途中で特に急なところは夏季には滝らしい。F1 下着。この滝はルンゼが逆くの字に曲がり細くくびれている所にあり、10m ほどで氷結している。この辺りから下方を見ると実に素晴らしい高度感がある。F1へ入るのに左岸の方に渡るところは特に落石が激しいので非常に気を使う。F1 自体も落石が激しく、少しも目をはなせない。拳大の落石が左上から関田の背に命中したがザックの水筒でことなきを得、続いてかぶっている左岸頭上の岩壁から一抱えほどの大きな岩が剥落、ルンゼの中は狭くバランスも悪いので逃げ場が無く助からぬと観念したが、途中で縦になって紙一重のところにかすって落ちた。しばらくは口もきけない。ピッチを上げて突き当たりのオーバーハングの下へ飛び込み一息入れる。

ここから10mほどのレッジに取り付きザツテルに至るのだが、レッジの側壁は岩がもろく外傾して悪い。1ピッチいっぱいハイマツにビレイ、更に1ピッチ不安定な草付まじりを登ってザツテルの下端に

つき、左上へ1ピッチトラバースしてダケカンバにビレイして食事をしながらルートを探すが、巨大な岩峰が乱立して二本槍がはっきりしない。今登ってきた二本槍ルンゼは上に向かってザツテルの左端が上がっているが、三本槍の左下に急なルンゼがあるのを見ているのでどこを登るべきか判断に苦しむ。結局課題に忠実にあるべき「劔岳の二本槍との間のルンゼ・・・」をたよりに三本槍の向かって左下へ登ることにする。

広い雪のザツテルを登るのに右手のリッジらしくみえる所へ出ることにして70mほど右上に出ると素晴らしい雪のナイフリッジとなっていて、右下は駒草ルンゼから分かれたルンゼである。この稜は途中に一岩峰を含み、ザツテル右下端から200m程でザツテル上部の一連の岩壁下に消えている。途中の岩峰は駒草側へ巻き、岩壁右岸下に入って登路をうかがうと、三本槍の稜は豪快に切れ落ち絶え間なく落石している。バンドをザイルいっぱい右へトラバースしてルンゼ末端の雪に立ちF2を登りにかかる。このビレイ点も落石が激しく気が気でない F2は蒼氷でピッケルが跳ね返るほど硬くオーバーハングして約5m、丹念にきざみ一時間かかってやっと越す。アイスハーケンを打つべきだったが型が気に入らなかったので省略した続いてF3にかかる。二つに別れてどちらも数メートル、やはり蒼氷で非常に硬い。一息入れて少量の食物を摂ってから右側の滝に取り付く、左岸の岩に一本ハーケンを打ち吊り上げ気味にせりあがり、岩壁と氷との間をチムニー登りで越えようとしたが滑り、スタンスホールド共に微妙で難しい。冷や汗をかきながらやっと越し露出している岩にビレイピンを打つ。

更に一ピッチ登り上部を見ると大きなニードルピークがいくつもあり二本槍がどれか見当もつかな

## 登山・登攀の記録

---

い。ルンゼの前方には滝が見え左から入っている浅いガリーの途中から右折すると草付に出てハイマツのある稜線らしいところに出られそうである。時計を見ると5時はとっくに過ぎているし、これから上の行程がどのくらいか見当がつかないのでビバークと決定し、ハイマツ目指してのぼりにかかる。草付は急傾斜で非常に不安定なのでアイゼンとフリクションが頼りでハイマツの稜に達した。ところが風通しが良すぎるので更にナイフリッジを登ることにする。うすいアレートが重なってリッジとなっているので戻り気味に降りて、稜の右側のチムニーを一ピッチ登り、次いで左へ出て、側壁を一ピッチ登ったところに40m位のバンドがあったので、ハイマツにビレイして一夜を明かすことにする。ツェルトを引っ被っているのだが足下に雪があるので寒い。

4月30日 晴れ後曇り

ビバーク地点(7:30)－早月尾根(9:10)－中の右俣－東大谷出合い(12:50)

目を覚まして周囲を観察すると目の前は立派なカールになっている。ザッテル左端のルンゼを登ると、このカールの底に出てくることになる。「劔岳」の概念図では昨日登ったルンゼと目の前のカール状が一つになって二本槍三本槍のルンゼとして出ているらしい。地形が「劔岳」の概念図通りとすれば向かい側の稜が二本槍の稜となるがあまりに遠くまたその間はルンゼでなくカール状であり、今いる稜からはとても降り立つことはできない。各稜の関係をスケッチしてよく考えてみると、「劔岳」記載の二・三本槍ルンゼはザッテル右上端から早月尾根の間にあり二俣から見て駒草ルンゼの左側のルンゼはザッテルの左側を少し登ったところで、上部の開けたカール状となっている。これは奥大日頂上から二俣からの写真を比較すれば理解できる。

ビバーク地点から100m程雪とハイマツ混じりの急斜面を登ると、雪のナイフリッジに出て早月尾根まで簡単である。右下を見ると雪の急斜面が稜の間へ吸い込まれるように見えなくなっている。

前日滝を直登すればここへ出てきて、日中にテン

トへ帰れたであろう。「劔岳」にもある通り、滝を登った方が簡単で時間的にも早かったと思う。早月尾根を歩く人にコールしたりして、楽しく早月の稜線について。通算36ピッチ目であった。関田はそのまま荷物を持って雷鳥荘へ、小山は中の右俣を降りてテントへと稜線で別れる。